

〈追悼〉

北山さんを偲んで

細見 和志

北山さんは、人権教育研究室に関わった教員にとって、いつも頼りになる存在でした。「人権教育」や「人権問題」に対して、職務を超えて、深く関わろうとされた方だったと思います。

こんなことがありました。「人権問題講演会」に関する会議で、教員の側からいいアイデアが出ないときなど、北山さんは、「こんなんでしょうか」といって、机の下から資料を出しながら、ご自身のアイデアを説明されることがよくありました。講演会のテーマだけではなく、候補となる講師の名前やプロフィールまで、詳しく紹介されるのです。教員もいろいろとアイデアは出すのですが、北山さんのように、講師に関する情報（そのテーマとの関わりとか、話がうまいとかまで含めて）を、事前に仕入れて、提案するというのは、なかなかできないことです。

北山さんは、日ごろから、新聞雑誌などのメディア報道に注意を払っておられ、これはと思う人物やトピックを蓄積されていたのでしょう。大学として取り組むべき人権課題や、その時々の中の流れにおいて重要だと考えられるテーマを、実に的確に捉えておられました。私が入権教育研究室の室長をしていた時には、しばしば、この北山さんの提案に助けいただきました。講演会のテーマが決まると、講師への連絡・依頼から会場の設営、講師の送迎にいたるまで、北山さんが他の職員の方々とうまく連携されながら、進めてくださったので、教員は本当に頼りにしていました。

また、北山さんは、各地で開催されている人権講演会や研究会へも、積極的に参加されていました。こ

うした地道な研鑽を続けてこられたからこそ、北山さんの、人権問題への幅広い理解が生まれたのでしょうか。私も北山さんから何度かこうした講演会への参加を誘われたことがありましたが、いつも多忙を理由にお断りしていました。北山さんのこうした姿に接するたびに、「なんでそんなに人権問題に関心を持っているのですか」と尋ねてみたくなったものです。残念ながらその機会は永久に失われました。

北山さんとの仕事で記憶に残っているのは、人権教育研究室のメンバーを中心に取り組んだ『国際人権百科事典』（明石書店）の翻訳です。この翻訳計画は、当初、総合政策学部の故安保則夫先生が発案されたものでした。翻訳作業に取りかかってしばらくたった頃、突然安保先生が天に召されるという不測の事態が出来し、翻訳作業は中断を余儀なくされたのです。その後、しばらくたってから、私を含む数人の関係者が集まり、安保先生の遺志を継ぐためにもこの翻訳作業を完成させることに意見が一致しました。大学との交渉の末、「関西学院大学人権教育研究室」が翻訳の責任主体となることも決まり、作業が再開しました。翻訳を担当する教員は、大学の教育研究業務の合間に作業を進めるわけですから、進捗状況の管理、原稿の整理とチェックはすべて北山さんともうひとりの事務スタッフの方の仕事になります。この仕事がちんちん行われないと、翻訳作業は大混乱をきたすことなのですが、北山さんは、複数の翻訳担当者から持ち込まれる原稿をきちんと整理され、どの項目が未翻訳なのか、どの項目がチェックを終えた完成稿なのか、

を手際よく仕分けされて、翻訳作業を滞りなく進めるうえで、大きな貢献をしてくださいました。その後、無事に翻訳は完成し、事典は世に出ることになったのです。この翻訳は、編集担当をくださった北山さんの支えがなければ、決して果たせない仕事だといっいいいでしょう。

最後に、仕事を離れた北山さんの横顔を紹介しましょう。私は、大学の業務や人権問題以外のことについて、北山さんと親しく話をしたことがあまりありません。いつも会うたびに、講演会の企画や室長室会の議題などといった仕事の話ばかりしていたのです。ですから、北山さんがどんな趣味をお持ちなのか、どんな映画や本がお好きなのかといったことについては、何も知りません。ただ、一度だけ、北山さんの休日の姿に触れたことがあります。ある日、ふとしたきっかけで、北山さんが大阪あたりの安くてうまい居酒屋にめっぽう詳しく、休みの日にはよくB級グルメ探訪をしておられることを知りました。たんに詳しいだけではありませんでした。探究が高じて、親しいお仲間を誘って、大阪周辺の食べ歩きのを主催しておられたのです。私も商店街の居酒屋のカウンターでわいわい喋りながら飲むのが好みなので、ぜひ一度、その食べ歩きの会に加えていただき、大阪の大衆居酒屋を北山さんの案内で梯子したいものだと思っていました。

そう思うと、あのときこんなことを聞いておけばよかったとか、こんなことを一緒にしたかった、というようなことばかりが残ってしまったような気がします。まさか、こんなに早く天に召されるとはだれも思っはいませんでしたから。

時間ができたら、一度、一人で大阪の北山さんが行きそうな街角の大衆居酒屋へ入って、北山さんの好きだったかもしれない酒の肴をあれこれ想像しながら、飲んでみたいと思っています。